

外池先生との思い出

野村 忠央

1. 外池先生との出会い

私は、今回、外池滋生先生の退職記念論文集の企画にご賛同頂いた発起人7人の中で一番若く、このようなエッセイを記すのは分不相応であるが、他の方々を代表して、先生との思い出を記させて頂きたい。

私が2005年に青山学院大学大学院文学研究科英米文学専攻の最初の課程博士号を取得し、その時の副査に外池先生が名前を連ねておられるので（主査は秋元実治先生）、私は先生の青学での弟子だと思われるかもしれないが、実は私は公の意味で先生の指導学生であったことは一度もない。¹

私は学部時代、英語史を専攻しようと思っていたので、先生のお名前を初めて目にしたのは、1992年に学習院に入学して、大学の書店にあった大修館英語学シリーズ1『英語史』（「アメリカ英語」担当）か、その隣にあったシリーズ3『英語変形文法』（「音韻論」担当）、あるいは今井邦彦先生の「英語学概論」の教科書『一歩すすんだ英文法』であろうと思う。その後、先生が初めて明治学院から学習院に非常勤にいらっしゃったのは、大学2年の1993年のことであつた。文学部棟のエレベーターで、まだ習ったことのなかった今井先生と一緒にになり、「今年は先生の英語学概論が開講されていないので残念です」と立ち話したら、「概論は（澤田治美先生と）隔年で担当していますから、来年、またやりますよ。それから、今年から専門家の外池君に来てもらっていますから（恐らく、MITでの在外研究からお戻りになった年であつたのだろう）、そちらを取ってみたいといいです」という話をされたことを記憶している。それで、実際に先生の授業を受講できたのは大学3年の「英語学演習」で、²よって、私が先生と実際にお会いしたのは、ミニマリスト・プログラムが萌芽し始めた

¹ 後述、「外池読書会」と呼ばれる研究会の参加メンバーも多くはそのような方々である。

² テキストはElizabeth Cowperの*A Concise Introduction to Syntactic Theory*（紫色の本）。

1994年、自分が21才、先生が47才の時ということになる。

そして、私と外池先生がその場で初めてお会いするような方と一緒にすると、「お二人はどういうご関係ですか？」というような話に大抵なる。そうすると必ず先生がされる話なので、（記しづらいのだが）以下のことを記しておくべきだろう。「前期試験の時期になって、ぼくも忙しい時期でもあつて、『前期にやったことをまとめなさい』という夏目漱石ばりの問題を出したら、途中で野村君が憤然と立ち上がって、答案用紙に『棄権』と書いて出て行ったんです（学習院には棄権という制度があつた）。恐らく『そういう問題を出すのはおかしい』という抗議の気持ちだったんだと思うんですが、今の時代にはそういう野村君のような『侍』はいなくなりました。ちなみに、彼は後期も1回も休まないで授業を受けて、後期試験も受けました。その年は単位を出してあげられなかったんですが、翌年も授業を履修して、³今度は正式に単位を出しました。」先生、あの折のこと、申し訳なく、気恥ずかしく思っております…

関連して、家内（野村（旧姓 森）美由紀）のことも一言だけ。私がかつて家内と出会ったのも外池先生の授業の場であつた。彼女は私が学部2年の時に、フェリス女学院大学から学習院の大学院に進学してきた。彼女は今、北教大で「英米文学特講」を担当していることからわかるように、元々、文学にも詳しく、文学を専攻するつもりだったと想像するのだが、フェリスに1年だけ東大退官直前の長谷川欣佑先生が非常勤にお見えだった時に感銘を受け、英語学の道に進むこととなった。その家内が大学院に進学するという話になり、フェリスには生成文法の専門家がいなかったので外池先生に授業で彼女を指導して欲しいという話になり、先生も「そういう熱心な学生がいるのなら、長谷川先生の後任は務まらないかもしれないが、お引き受けします」ということになった。だが、行ってみると、彼女はフェリスにはおらず、しかし、偶然、教え始めることになった学習院の方に彼女はいたということであつた。

2. 外池読書会

私はその後、1996年に青学の大学院に進学したのだが、「今後も生成文法を学んでおくのは大事だ」と考え、学内の谷美奈子先生⁴の授業以外にも外池先生の授業を取りに行こうと決心した。行ったこともない明学の白金キャンパス

³ テキストはJamal Ouharaの*Introducing Transformational Grammar*。

⁴ 偶然ながら、後年2002年、先生は谷先生の後任として青学に着任されることとなる。

に行き、事務の方に「英文学科の外池先生とお会いしたいんですが」、「外池でございますか、少々お待ち下さい」と頼んだ自分は勇気があったと思う。その結果、学部のゼミに出なさいということになって、出させてもらったのだが、テキストがGB理論のいいまとめになっていると言われて *Minimalist Program (MP)* の Chapter 1 を読んでいたのには驚いた。学部3・4年生でMPとは、かわいそうだなとも思った。ちなみに、外部の私をコンパに呼んでくれたそのクラスには、大野真機君や淵田美穂さん、私と同じもぐりで(大学卒業後の一般就職先を辞められたという)木口寛久君がおられた。

その後も私は、(大学で正規に開講されていた)先生の「授業」としては、明学の二部の「英文法」で岩波書店の『生成文法』⁵(この頃、青学の博士浪人中だったが、ほぼ毎週に近く、先生は夕飯がてら私を飲み連れて行って下さったと思う)、日本女子大の大学院の授業⁶で Vivian Cook の *Chomsky's Universal Grammar*、今井先生(在外研究時)代理の学習院の大学院の授業でMPの Chapter 3 と 4、明学の大学院の授業⁷で長谷川信子編 *Japanese Syntax in Comparative Grammar* や先生の代表的論文の一つ“Japanese as an OVS Language”(1995年)などを学んだと記憶している。

これに対し、表題の「外池読書会」というのは、多く、上記の「授業」の後、どこかのスペースを借りて、毎週、数時間に互り(そして、私は遠い北海道の地で参加できなくなってしまったが、今も)続けられている勉強会、読書会である。現在は青学の外池研究室での開催に落ち着いていると思うが、当時は学習院、立教、明学言文研近くの教室など様々な場所を渡り歩き、うまく教室が見当たらない時は、(話し合いなどをしてもよい)高級喫茶店「談話室 滝沢」や池袋駅近くの喫茶店などで読書会をしていたことも思い出される。通常の読書会は10人前後が参加していたと思うが、喫茶店の読書会では、先生、西前明さん(発起人)、大野君、私の4人だけという時代もあった。

ここで外池読書会の特徴を2つ記すと、まず、特定の大学に閉じられてい

⁵ 先生が、「第1次認知革命」(GB理論)の章を執筆された、他の各章の内容も含め、優れた本(1998年)。余談ながら、「極小主義理論」については、『言語学の領域 (I)』(朝倉書店)に簡にして要を得た優れた解説・論考を書かれている(2009年)。

⁶ 女子大だが、青学、明学、法政、津田塾などの12大学の大学院で単位互換している「英専協」という便利で有益な制度のために履修できた。恐らく津田塾出身の鈴木泉子さん(発起人)もそのお陰で先生と知り会ったのだと思う。

⁷ 先生が明学在職中、齋藤興雄先生の在外研究中に、唯一、大学院を兼任された年で、先生の日本語統語論の授業を受講できたことは幸運であった。

ない、来る者拒まず(言うまでもなく去る者追わず)の開かれた読書会だということが挙げられる。それは、学部生か院生か大学で教鞭を取っている人間かも知れないこと、また、参加者の年齢が下は20代の学生から、上は会社役員を定年し大学院に入り直された、先生よりも年上の坂野収さんや中栄欽一さんなどが参加されていることにも示されている(時に参加されていた دونالد・スミス先生も年上である)。このような多様な人物が集う読書会となった理由は、先生の還暦のお祝いの際、家内が寄せた「大学の垣根を越えて、先生のもとに、(読書会などの形で)大勢集まりますのは、先生のお人柄とご人徳と存じます」というお祝いのメッセージの通りと思うが、その他にも、先生が明学で大学院を兼任されていなかったこと、⁸ また、先生は明学の言文研や国際交流センター長などでもご多忙だったが、依頼される数多くの大学の非常勤を断らず引き受けられていたことなども関係しているのではないかと想像する。つまり、このような偶然の状況がなければ、読書会も例えば、明学の大学院生メンバー中心に閉じて開催されていたかもしれず(仮定法なのでわからないけれども)、青学、明学、学習院、都立大、法政、津田塾、東大といった院生が広く参加する読書会にはならなかったのではないかと思う。なお、余談ながら、上記のような事情から、明学の学部時代に先生の授業に感銘を受けて言語学を志した方々で、他大や海外の大学院に進学し、研究者の道に進まれた方も少なくないと想像する。本記念論文集寄稿者に限っても、北原久嗣先生(発起人)、遠藤喜雄先生、岡俊房先生、宇佐美文雄先生、江頭浩樹さん(発起人)、木口寛久君、吉田正哉君、森田千草さんなどが挙げられる。ちなみに、この論文集の、私ともう一人の編集実働部隊を務めてもらっている江頭さんは、明学の国際学部2年次に初めて先生に会った時、独力で(一時代前の)ジェイコブズ & ローゼンボーム『基礎英語変形文法』を読んでいた江頭さんに「今の変形文法はもっと華麗に変形する」と言われたことを印象深く覚えているということであった(なお、先生はご記憶にないそうである)。

次に、外池読書会の第2の特徴として、ハンドアウト発表形式や要旨発表形式ではなく、その難易度に拘らず「精読」を旨とするということが挙げられる。⁹ 通例、大学院の授業や研究会では、一人何十ページの分担があたって、

⁸ 先生に限らず、当時、松本曜先生や佐野哲也先生なども大学院指導教授ではなかったと記憶している。

⁹ 長い論文だけではなく、短い記事も精読した。代表選手は先生が大石正幸先生(発起人)と共著で書かれた『英語青年』の連載「最新チョムスキー理論の概要」(1992-93年)などである。この連載はチョムスキーの1991年秋学期の授業を、本記念論文集の寄稿者でもある小泉

そのハンドアウトを作り、完全な理解を前提とした上でのプレゼンテーションが求められるものである（鈴木さんを見ていて津田もそういう厳しさが強くあるんだろうなと感じた覚えがある）。しかし、外池読書会では、毎回数ページの分担について本人なりの「和訳」をしていくことだけが最低条件である。私はこのスタイルでの参加が許されていたからこそ、長年に亘って先生の読書会に参加できたのだと思う。（よって、チョムスキーの最新論文などは半期いっぱい、あるいは通年かかったりすることもしばしばであった。）もちろんハンドアウトを作れば本人も勉強になるし、必死で勉強するからいいに決まっているが（青学の大学院も古英語文献講読以外の授業は当然、そうだった）、例えば、外池読書会で全て draft の段階で読んでいたチョムスキーの *MP* の Chapter 4 (1995 年)、“Minimalist Inquiries” (初出 1998 年) (西前さんはこの時から参加されたと思う)、“Derivation by Phase” (初出 1999 年)、“Beyond Explanatory Adequacy” (初出 2001 年) (江頭さんはこの頃から参加されたと思う)などを、初読の段階で要旨をまとめると言われても自分には絶対無理である。

先生は「ヨコのものゝタテにするだけでも意味がある」とおっしゃるが、本当にその通りだと思う。だいたいあんな難解なもの、私は一人じゃ絶対読まなかったと思うし、読書会に出ている時は訳してみてもチンプンカンプンということも多かったが（その私の訳を聞いてまわりの方々から「ああ～、なるほど」などと聞こえてくるのは不思議な体験だった）、しかし、後で何ヶ月か何年か経って、他の論文や本を読んでいたり、あるいは、例えば TEC（理論言語学講座）の長谷川欣佑先生や渡辺明先生が別のトピックの話をなさっていたりする時などに、「あの時のことはこういうことを言っていたのか！」といくつかの点がパーッと結び付く時があるから不思議なものである。昔の漢文素読や『声に出して読む日本語』などでも言われることだが、「わからなくても読んでみる」というのは大切な姿勢だと思う。いつのことだったか、「最近、内容がわからないで読書会に出ています。読書会、やめようかとも迷っています」ということを先生に伝えたことがあったのだが、そうすると「ほくも昔、太田朗先生の読書会で *Aspects* を読んでいた時、さっぱりわからなかった。でもいつかわかる時が来るから君も頑張っておきなさい」と話して下さった。私は先生がこのようなお配慮のおかげで読書会参加を続けることができたし、また他の

政利先生、北原先生、野地美幸先生との研究会での議論も踏まえ、まとめたものだと伺ったことがある。

参加メンバーも私も、上述の外池読書会スタイルの下であったからこそ、本当に多くのことを学べたのではないかと思う。

3. 教育者としての外池先生

読書会に続いて、先生の教育者としての側面も一言だけ記しておきたい。先生の授業は、概論・講義系の授業でも、演習系の授業でも、上述の如く、基本的に精読を旨とされ、よどみない平板調の日本語、英語で 90 分びっしり、濃度の濃い授業をされる。また、先生の樹形図を描かれる早さに学生は誰しも圧倒されると思う。¹⁰

先生は授業中、学力が低い、勉強ができないという理由で学生を注意されることは決してないが、担当があつた箇所の和訳をやってこないなどの最低限の義務を果たさない学生には非常に厳しい。（言うまでもなく、受講態度が悪い学生に対しても、当然、そのような態度は決して許さないということも耳にしたが、私が受けた授業の中ではそのような学生は見かけなかった。）

次に、論文指導について記すと、先生を見知っている方はみんなご存知だと思うが、先生は専門的にどんなに難しいことであっても、逆にどんなに初歩的な質問やささいな日常的、時事的な話題であっても、流されたり、馬鹿にされたりすることなく、本気で議論される方である。よって、先生と見解や立場が異なる時は—私も先生と何度か大議論になったが—ちょっと辛いなという経験をされた方々も複数おられると思う。私個人としては、リンカーンのゲティスバーグ演説における *government of the people* の *of* の解釈を巡ってとか、博士論文に初めて詳細に書き込んで下さった先生のコメントに、「本当にありがたいことだ。なるほどなるほど」などと思うと同時に、ところどころに散見される厳しい内容に胸が痛くなったことも思い出される。例えば、博論のどこかの章の終わりには「Adjunct 全体の理論を示すべきである」と書かれてあって、青山学院大学図書館や国立国会図書館提出用の修正版の博論を 1 か月弱で提出する前にどう直せばいいのか途方に暮れた。¹¹

¹⁰ 私は多くの先生方に生成文法を習う機会があったが、樹形図を描かれる速さでは外池先生と高見健一先生が抜き出ていると思う。

¹¹ ちなみに、外池先生も外部副査の千葉修司先生も私の間違った英語を直して下さって、本当に勉強になった。よってという訳でもないが、自分も現在、学生の卒業論文の英語や査読論文の書式などについて、エネルギーが本当に掛かることだが、気付いた点はできるだけ指摘するように努めている。

しかし、先生に論文指導を受けたことがある人はみんな感じることであろうが、先生は研究者仲間、読書会メンバー、院生、学部生を問わず、論文構想を相談されれば、時間の許す限り、議論に付き合っ下さるし（品川へ向かう山手線内で曇ったガラスに指で樹形図を描かれ、指導されていた姿も記憶している）、あるいは、ご自身の手柄としてもいいような、なるほどというアイデアをいくつも思い付かれ、惜しげもなく披瀝される。本記念論文集の寄稿者の方々の中にも、先生のアイデアに助けられた方は数多くおられるのではないかと想像する。

4. 研究者としての外池先生

研究者としての外池先生については、今回、先生ご自身の「私の研究遍歴」というエッセイもあるので、書きたいことは多々あるのだが、簡潔に記したい。私なりに先生のご研究をまとめさせて頂ければ、「外池先生は、日本語・英語の両方に対して、鋭い言語直観と言語観察の力をお持ちになり、そして、それらの言語事実を整合的に説明する、大胆奇抜かつアイデアあふれる仮説をいつもご提案なさる」ように思う。また、その根底に力強い英語力が存在することにも多くの人が尊敬の念を抱いていると思う。

先生の前期の一連のご研究としては、私見では例えば、英語では「名詞句の内部構造、抜き出し」に関するもの、日本語では「かきませ (Scrambling)」や「日英語鏡像関係」に関するものが挙げられると思うが、個別研究においても、『英語青年』「Agr の廃止をめぐる」(1993年)、EPP 素性の廃止を主張した「Chomsky (2001) における 2 つの問題—「音韻部門の移動規則」と EPP 素性—」(2001年)、『COE 成果報告』“Attract F and Elimination of the LF Component—A Proposed I Model of Grammar—”(1998年)など、その後のチョムスキーの方向を予言するような重要な論文もいくつもあると思う（海外の研究者が知り得ていないことが残念である）。

また、先生の後期の一連のご研究としては、演算子-変項構造、数量詞、再帰代名詞などを含み、「外池理論による Minimalist 分析」とでも言えるものが挙げられるが、それは先生の爾来からの（そして、恐らくは数ある言語学者の中で唯一の）ご主張である「日本語は英語が SVO 言語であると完全な鏡像関係としての OVS 言語である」という仮説に辿り着くものと考えられる。

全ての先生がそうではないが、外池先生のような大家、あるいはそうでなくとも還暦を過ぎられた先生というのは、新しい研究には手を付けず、昔の自分

の研究の貯金のまともに入られることがしばしばだと思う。しかし、先生は退職間近の今日に至るまで決してそのようなことはなく、チョムスキーや他の研究者から有力な影響力のある仮説が提出されるたびに、その crucial な問題点を指摘し、ご自身なりの、我々がアッと驚くような代案を考え付かれる。チョムスキーがミツ・ロナとの対話で、博士論文でやっていたことを始終やり続けているような研究者は望ましくないという趣旨の発言をしていたと思うが（私はそのような研究者の存在も間違いなく大切だと思うが、しかし）、先生はそうではない、チョムスキーが肯定するであろう研究者である。その感を一層強くしたのは、昨年（2013年）8月に、日本英語英文学会北海道支部設立大会記念シンポジウムで講演して頂いた時で、久しぶりに、66歳になられた先生の理論全体を伺ったのだが、旧来の外池理論が revise され、随所に新しいアイデアが鑿められていたのは本当に驚き、感心した。日英語鏡像仮説だけ少し記すと、従来、先生は日本語の深層構造の OVS の主語、目的語は見えない pro で、付加部位置にある顕在的な主語、目的語がそれらを c 統御し、同じインデックスがふられるという趣旨の仮説だったのだが、現在では OSV の語順に左方付加（いわゆる「かきませ」）が起こることで日本語の諸現象が説明できるという仮説に進化していた（私の理解に誤りがあることを恐れるので、これ以上の詳細は先生の「私の研究遍歴」をご覧ください）。

これらのことが示しているのは、先生が以前のご自身の仮説に関して、「過ちを改むるに憚ることなく、「君子豹変す」だということである。この態度は科学者たるに重要な要件であろうが、影響力が大きい人ほど「言うは易く、行は難し」であろう（例えば、Chomsky が Postal の Raising-to-Object の主張を是認するまで 30 年近い年月が流れたのではないだろうか）。しかし、先生はそれを地で行っている研究者である。一例だけエピソードを記すと、青学で修士の院生であった小澤由紀子さんが there 構文を修士論文のテーマにして、彼女は意味上の主語には部分格が与えられているという立場を採用したのだが、先生はその修論構想を聞いた時に、それはおかしいという議論を非常に強い調子でされた。しかし、それから半年か一年後だったか、宴席で「野村君、there 構文の意味上の主語には be 動詞から partitive が与えられているという仮説は正しいんじゃないかと思う」と聞かされた時は、私もさすがに苦笑しつつ、「先生、それはひどいですよ！」と応じた覚えがある。

この流れで、しかし、弟子として残念だなあとすることを一点だけ記すと、先生にはあれだけの業績がありつつ—意外だと思われると思うが—著書としての単著がおありにならない。そして、このことは上記、先生の経験科学者と

しての姿勢と無関係ではないと思う。しかし、昨年の講演を拝聴するに、嬉しいことに、ハワイ大学での在外研究で最新外池理論の核となる諸論文をまとめられたように感じたので、定年後の自由な時間をお使いになられ、ぜひ単著を出版されて、外池理論を世界に問うて欲しいと切に思う。

5. 外池先生のユーモア、いたずら好き

さて、前節までの内容を読んできて下さった読者諸氏には、先生は物事を極めて論理的に考え、合理性を重んずる、¹²何事にも真面目な研究者としての側面しかないように映るかもしれない。しかし、先生はテニスやゴルフ、囲碁や麻雀などもこよなく愛されるし、実は授業の場面だけでは想像され得ないと思うが、ユーモア溢れた、かなりのいたずら好きでもいらっしやる。

それこそ、最初に授業でお会いした時には、「この先生は言語学のことしか興味がなく、1分1秒でも無駄にするのが惜しいのだろう」と思っていた。というのは、学習院の2限は10時40分開始なのだが、毎回、授業前の10時35分ぐらいであったであろうかに足早に教室に入って来られ、着くなり、「森君、伊藤君¹³…」などと出席を取り、それが終わるや否や、「今日は123ページの4行目から、野村君」と授業が始まり、90分びっしり授業をやり終えられると、疾風のように、¹⁴教室を去って行かれたからである。また、いつであったか、「先生、たまには何か余談をして下さい」とみんなでお願ひしたら、「じゃあ、このセクションが終わったら」と言われて、何か先生のご趣味の話か、世俗的な内容の余談が始まるのかと期待していたら、日本語の活用の分析が始まったのであった。

しかし、後から先生と親しくなってからお聞きしたところ、授業はもう10時半には始まっていてご自身は遅刻していると思われていたらしく、また、12時10分を過ぎたら足早に去っていたのは、3限も日本女子大で非常勤があ

¹² 余談ながら、その意味で、先生はその思考法が、芸能界からスパッと姿を消された上岡龍太郎氏に似ていると何度か思ったことがある。(先生は幽霊、霊魂、死後の世界、占い、字画なども信じられないが、その点でもお二方は似ていると思う。) いつぞやそのことを尋ねてみたら、やはり先生も上岡氏を尊敬しているとのことだった。

¹³ 先生は男女関係なく、学生を「君」で呼ぶ。

¹⁴ 先生のことを「畏友」と称した中島平三先生も「発見の興奮」(大修館書店)の中で「外池さんは大変行動力があり、彼の歩き方や話し方がそうであるように、前へ前へとどんどん進んでいく」と記されていたが、全くその通りである。

り、また、非常勤の方には昼食が出ていたんだそうで、せっかくなのでということで、急いで日本女子大に移動されていたということであった。

いたずらに関しては枚挙に暇がない。私に関して言うと、例えば、先生やみんなと楽しく飲んで酔っ払った自分が帰宅すると、リュックサックに食べ終わった弁当がまた包装されたものと飲み干したビール瓶の口にティッシュが詰められたものが入っていたりした。翌週、「先生、あの瓶とか一体何なんですか?」とお尋ねすると、「野村君のリュックが汚れないようにティッシュを詰めておいた」という訳のわからないお答えであった。あるいは、明学の学部ゼミのみんなが打ち上げに呼んでくれた時(ちなみに、そのメンバーで寄せ書きをしたベルトを先生に差し上げた覚えがある)、2次会に移動する道すがら、信号待ちをしていたところ、私が「先生、天津甘栗、売っていますよ」と何気なく言ったら、急に「買うか」と言われ、その買ったばかりの熱々の天津甘栗を私の背中に入れようとされたり、「2次会のカラオケボックスは持ち込み不可なのでやばいですよ」と言っているのに、灰皿に天津甘栗をいっぱい盛られ、それを店員に注意されると「隠せ、隠せ」と愉快そうに言われたりもしていた。あるいは、読書会後の居酒屋で野球中継がやっていて、確か、根本貴行さんが巨人ファンだと言ったら、アンチ巨人の先生は、「根本君、じゃあ、巨人が負けたら、ここの勘定は全て君が払いなさい」と言われたり(実際に巨人は負け、冗談ながらも根本さんは支払いを迫られていた)、帰り道、根本さんの靴の踵を踏むといういたずらを何度も繰り返されたりしていた。明学の読書会の打ち上げでは、その終了間際、お手洗いに立った淵田さんが席に戻って来ると、中華料理屋のテーブルには誰もおらず、彼女が泣きそうな顔になって店を出て来る(みんな店の外で隠れている)ということもあった。

また、学習院での、毎回、長いチョムスキーの読書会の後、今は壊された目白駅前のコマースというビルにあった中華料理屋によく行ったのだが、ただ飲んでいても面白くないからじゃんけんて負けた人がビールを飲むという罰ゲームをやろうと言いつつ出され、酒を飲まない家内に、「じゃあ、森君は代わりにラー油を飲みなさい」と言われ、彼女は本当にラー油を飲んでた。それを助けるためか、自分が飲みたいためかわからないのだが、お酒が強い勝山裕之さんは「ぼくが代わりに飲みます」とうれしそうに飲まれていた。

青学着任後のことも少しだけ記すと、先生の歓迎会を教員や院生で催した折、確か2次会まで行って会計の段になり、幹事の中澤和夫先生(発起人)が「外池先生、今日のところは我々で」という申し出に「いやいや2次会まで全額は申し訳ない」という外交的やりとりを数回繰り返した後、普通は「じゃあ、

今日のところはお言葉に甘えます」で終わると思うのだが、会って間もないであろう中澤先生に、「いいから受け取りなさい!」と、中澤先生のワイシャツと背中の中に1万円札を押し込もうとされていた。また、青学着任後の最初の院生であった田口和希君（嫌いな漬け物を食べさせられるなど、いつも先生にいじられていた）が、打ち上げから渋谷駅までの帰り道、先生をおどかさうと道に隠れていたのだが、それを先んじて察知した先生は知らないお宅の水撒き用のホースだったかの蛇口をひねって、田口君に水しぶきを浴びせていた。この種の話は事欠かないのだが、この辺でやめておこう。

6. いつまでもご活躍を—結びに代えて

本記念論文集は、予想を遥かに超える多くの方々が執筆をご快諾下さったため、一人当たりのページ数が制限されてしまったことを—寄稿者の方々への感謝の念と共に—心苦しく存じている。よって、先生のことで書きたいことはまだまだあるのだが、私も紙幅を守って、筆を擱きたい。

上述、出会いの頃、「先生は言語学のことしか興味ないのか」と記したが、実は逆で、先生は森羅万象のことに興味がおありだと思ふ。私との狭い議論だけでも、英語学、言語学に始まり、政治、経済、教育、哲学、果ては5文型論、天皇制などにも及んだ（先生、学部生の頃からの議論ですが、5文型は必要だと思います）。その他、スポーツや科学、¹⁵植物などにもご関心深く、要するに、先生は“義務”としてではなく“性分”として「知的好奇心」に溢れており、常に「知の探究」、「真理の探究」を目指しておられるのだと思ふ。我々弟子たちや本論文集の寄稿者の方々は、（卓越した言語学者としての姿は言うを俟たず）先生のそのような姿に感銘を受け、尊敬の念を抱いていると想像する。

外池先生、どうぞいつまでも、第一線の言語学者、授業をびっしりやりつつも時々、学生にいたずらをしかける先生、ハワイ生活を楽しまれるテニス、ゴルフの愛好家であり続けて下さい。

¹⁵ 先生がMPの翻訳を出版された時、記念にサインを求めたら、「反証可能性のないものは科学ではない」と記された。先生の学問に対する姿勢を端的に言い表していると思う。

執筆者一覧

(アルファベット順)

阿部 潤	東北学院大学・非常勤講師
秋元 実治	青山学院大学・名誉教授
坂野 収	青山学院大学大学院文学研究科・科目等履修生
Josef Bayer	コンスタンツ大学言語学科・教授
江頭 浩樹	大妻女子大学比較文化学部比較文化学科・准教授
遠藤 喜雄	神田外語大学大学院言語科学研究科・教授
Hubert Haider	ザルツブルク大学言語学科・教授
保阪 靖人	日本大学文理学部ドイツ文学科・教授
今井 邦彦	東京都立大学・名誉教授
伊藤 達也	首都大学東京・非常勤講師
泉谷 双藏	東京医科歯科大学国際交流センター・准教授
川島るり子	明治学院大学・非常勤講師
木口 寛久	宮城学院女子大学学芸学部英文学科・准教授
金水 敏	大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻日本文学国語学専門分野・教授
北原 久嗣	慶應義塾大学言語文化研究所・教授
小泉 政利	東北大学大学院文学研究科・准教授
久野 暁	ハーヴァード大学言語学科・名誉教授
Eric McCready	青山学院大学文学部英米文学科・准教授
森川 正博	名古屋外国語大学・名誉教授
森田 千草	目白大学外国語学部英米語学科・専任講師
中栄 欽一	青山学院大学大学院文学研究科・科目等履修生
中島 平三	学習院大学文学部英語英米文化学科・教授
中澤 和夫	青山学院大学文学部英米文学科・教授
根本 貴行	東京家政大学人文学部英語コミュニケーション学科・准教授
西山 佑司	慶應義塾大学・名誉教授
野地 美幸	上越教育大学大学院学校教育研究科言語系（英語）・准教授
野村美由紀	北海道教育大学・非常勤講師
野村 忠央	北海道教育大学教育学部旭川校教員養成課程英語教育専攻・准

教授

- 大石 正幸 東北学院大学文学部英文学科・教授
 岡 俊房 福岡教育大学教育学部国際共生教育講座・教授
 大塚 祐子 ハワイ大学言語学部・准教授
 Peter Robinson 青山学院大学文学部英米文学科・教授
 西前 明 明治学院大学・非常勤講師
 佐野 哲也 明治学院大学文学部英文学科・教授
 瀬田 幸人 岡山大学大学院教育学研究科社会・言語教育学系英語教育講座・教授
 島田 守 龍谷大学・名誉教授
 Donald L. Smith 北ジョージア大学付属学部・非常勤教授, 青山学院大学・元教授
 鈴木 泉子 信州豊南短期大学言語コミュニケーション学科・専任講師
 高橋 洋平 読売自動車大学校自動車整備学科・非常勤講師
 高見 健一 学習院大学文学部英語英米文化学科・教授
 Christopher Tancredi 慶應義塾大学言語文化研究所・教授
 外池 滋生 青山学院大学文学部英米文学科・教授
 豊島 孝之 九州工業大学大学院情報工学研究院人間科学系/生命体工学研究科人間知能システム専攻・教授
 塚田 雅也 青山学院大学・國學院大学・非常勤講師
 上田 功 大阪大学大学院言語文化研究科・教授
 宇佐美文雄 明治学院大学・非常勤講師
 Henk C. van Riemsdijk ティルブルク大学・名誉教授
 山内 一芳 首都大学東京オープンユニバーシティ・特任教授, 東京都立大学・名誉教授
 吉田 方哉 ノースウェスタン大学言語学科・助教授
 遊佐 典昭 宮城学院女子大学学芸学部英文学科・教授

より良き代案を絶えず求めて

(In Untiring Pursuit of Better Alternatives)

ISBN978-4-7589-2210-4 C3080

編者 江頭浩樹・北原久嗣・中澤和夫・野村忠央
 大石正幸・西前 明・鈴木泉子
 発行者 武村哲司
 印刷所 日之出印刷株式会社

2015年3月23日 第1版第1刷発行©

発行所 株式会社 開拓社
 〒113-0023 東京都文京区向丘1-5-2
 電話 (03) 5842-8900 (代表)
 振替 00160-8-39587
<http://www.kaitakusha.co.jp>

JCOPY <(社)出版者著作権管理機構 委託出版物>

本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構 (電話 03-3513-6969, FAX 03-3513-6979, e-mail: info@jcopy.or.jp) の許諾を得てください。